

⑨ ニューヨークという地点を選んだのは、まさに「便利」だからだ。それにしても、ニューヨークでどんな大集会を開くことになるのだろうか。その前に命令するということが、即ち命令者が死んだので、その弟子たちが、それぞれ主人になり、それも一人も弟子のない主人にならねばならぬ、運命的なまでの経路を歩まねばならぬことは長々と述べたが、果してそれ等「命令する芸術」を指向する人達の作品は、具体的には、どういうものかを知りたがる人々もいるだろう。まずは好奇心の強い人のためにも、説明しておかねばならないことだ。

A、「命令する作品」といっても、そう急に革命的なものでないのは確かだ。作品に即していえば、作品を最高のものと考えないことだ。

しかし、作品は人間の考え(命令)を伝えるものとして作ることも確かだ。だから、作品として最高に低落することだ。例えば本を作る。一頁、一頁に空気をいれて、フクラして読み、または見えるゴムの袋であり、次の頁は前の頁の空気を抜いてでなければ読めない、というように読者が操作してゆかねば続けてゆけない。勿論、相手につづけて読ませる力は別に当然必要なのはあたりまえだ。要するに観客を観客でなくし、作品を媒介として主演させることだ。それが物であっても覗くために腰を折るといった具合に。「命令」という言葉がオーバーだから説明に困るが、ただ見ただけでは、全部は見えないという簡単な原理が、そのまま簡単に仕込まれているにすぎないものだ。だが出発は、その辺からでないで理解、発展が困難になると思うが、如何。その内に、つぎつぎと理解した人の中から天才が出て、色々なことを発明、観客を神々にしてくれるだろう。

B.それ等、自分(作者)自身を証明、あるいは説明する作品を携帯してニューヨークへ、飛行機、船、自動車、自転車など、それぞれの乗りものを使って行くわけだ。

場所は画廊か、工場の廃屋かだ。公園でもいいのだが、まだ我々自身が知らぬ場所なので、一応用心して、屋内ということにしておこう。その中で行なうことは一九六二年福岡市で開いた「英雄たちの大集会」と全く同じ考え方でやるのだ。